

## 老齢動物の病気について(1)

さて、今号から「老齢動物の病気について」の第二弾、「犬の僧帽弁閉鎖不全症(MR)」についてお話したいと思います。MRは結果として起こる状態の「僧帽弁逆流」、原因となる「僧帽弁粘液腫様変性」と表現されることもあります。

MRは、犬の心臓病の中でもっとも発症率の高い病気ですが、どんな犬でも高率に発症するというわけではなく、発症しやすい犬種が存在します。代表的な好発犬種はキャバリア、チワワの他、トイ・プードル、ポメラニアン、マルチーズ、ヨーキー、ミニチュアダックスなどを挙げている教科書が多いようですが、日本では柴犬の発症も多く認められます。人気犬種のゴールデンレトリバーなどの大型犬は拡張型心筋症という別の心疾患が好発します、これについてはまた別の機会にお話ししましょう。

心臓病と診断された時、特別で治らない病気だと絶望的な思いを抱く方も多いようです。ペット保険会社によると「心臓病」は飼犬の死因の第2位で、多くの犬が罹患してしまう病気ではあります。それでも早期に発見すれば、いろいろな対策を施すことで、症状が悪化するまでの期間や死亡までの期間をかなり先延ばしにすることが可能となりました。

心臓は収縮と拡張を繰り返すことで、左側は全身へ、右側は肺へ、血液を常に循環させています。MRは左心房と左心室の間の僧帽弁に異常が起こる病気です。僧帽弁は2枚で構成された心筋の膜で扉のような役目をしているのですが、通常は左心房から左心室に血液が流れる時だけ開き、左心室に入った血液は左心房に戻ってくることはできない一方通行の仕組みになっています。ところが、この僧帽弁が変性してもろく

## 犬の僧帽弁閉鎖不全症 ①

## 「1. 僧帽弁閉鎖不全症とは？」



文・写真 中西章男  
text & photo by Akio Nakanishi



なったり厚く変形してしまったりすると、弁がきちんと閉まらなくなり、本来の血液の流れとは逆に、左心室から左心房に血液が逆流してしまいます。また、僧帽弁を支える筋肉の柱に異常が起きた時も、逆流が生じます。このような病態を「僧帽弁閉鎖不全症(MR)」と呼びます。

MRと診断されるケースはさまざまです。病態が進むと僧帽弁逆流はやがて「うっ血性心不全」から肺水腫を発症させます。そして来院時に原因がMR

と診断されるケースが多く見られます。しかしながら、健康診断や通常の診察で心雑音が聴取され、症状が出ていないごく初期に発見されるケースも多く存在します。僧帽弁の逆流が起こると血液に不整な流れが生じ、心雑音が発生します。この時、聴診により僧帽弁領域に収縮期性雑音が聞き取られるというものです。大きな検査でなく「聴診」だけで「MRかもしれない」と疑うことができるのです。(次号に続く)



## Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学(現日本獣医生命科学大学)大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社